

将来の職業会計人を育てる 高大連携教育プログラムが スタート

二〇〇三年一〇月、高大連携教育プログラムの一環として、法人内四高校の三年生を対象にした「基本商業簿記」講義が開講された。日商簿記検定試験三級の内容に対応した、高校生にはなじみの薄い分野の講義にもかかわらず、受講生約二百八十人と人気を集めている。

このプログラムの企画立案者が松本敏史商学部助教授だ。

「少子化のなか、各大学が生き残りをかけて熾烈なレースを繰り広げている現在、商学部に対する評価の一つのパロメーターは公認会計士の合格者数です。同志社大学は長らく関西でトップ、全国でも五、六位の合格者数を誇っていました。しかし年々その順位を下げ、一昨年は全国で九位、関西では三位にまで落ちてしまった。そこでこの状況の打開策として考え出したのが、このプログラムなのです。幸い、同志社には法人内高校に優秀な生徒がたくさんいます。この高校生たちに早い時期から簿記を教えることで、彼らが将来会計士をめざすきっかけになるのではないかと考えた



高校生に講義する松本敏史先生

のです。また、大学における学問的興味を高校生から引き出したり、進路決定や職業選択の一つの指針として役立たせることも期待できるでしょう」

そこでまず松本先生は、以前から交流のある同志社高校の菊地先生にこの企画を持ち込んだ。

現在、同志社の各高校も転換期を迎えている。公立高校が大学との連携を図って特進コースを設けたり、中・高・大一貫教育に力を入れている現状のなかで、学内高校も独自色を出して生き残らなければいけないからだ。高大ともに何とかしなくてはという必要性を強く感じていた時に持ち上がったプログラムだけに、企画はスムーズに動き出した。

当初の予定では、受講者は三十人程度を見込み、講義を担当するのは志賀理助教一人。しかし受講者が殺到、面接などによつて希望者を絞ったものの、結局一クラスでは対応できず、二クラスに分けて急ぎよ松本先生も担当することになった。そ

して両先生のゼミからチューター（学部生・院生などによるアシスタント）を募り、ようやくスタートしたのである。

「三十人のうち三分の一でも会計士をめざしてくれたら、当初の目的は果たせると思っていたのですが……。こんなにニーズがあるとは、私自身も高校側も驚きました。まして、普通科の生徒ですから。さらに驚いたのは生徒の理解力の高さです」
松本ゼミで、チューターをつとめる三次生の山崎泰佑さんは、

「本当に呑み込みが速くて。高校生が初めてふれる分野なので、新鮮味を感じているのでしょう。僕が高校生の時にこの講座があれば受けたかったですね」と語る。

「大学生でも苦手だという人が多い簿記。でも、生徒たちは一度の説明で理解し、すばやく練習問題をこなしていきます。簡単な内容の講義だと彼らは気を緩めますが、難しい



チューターが生徒の質問に答えながら指導する

問題であればあるほど真剣に聞いてきます。講師としてもやりがいがありますね」松本先生も手ごたえを感じているようだ。

「商学部志望で、商学部には簿記が必須だと聞いて受講しました。予想していた以上に難しいですが、まずは三級を突破して、その先も考えてみたいです」（橋本亜樹さん・同志社高等学校）

「商学部入学や会計士という具体的な目標ではなく、単なる簿記に対する興味で受講したので、苦戦しています。でも松本先生の講義は分かりやすく、いつも聞き入っています」（宮森剛裕さん・同志社香里高等学校）

受講生たちも苦しみながら、真面目に取り組んでいる。この中から将来、どれだけの会計士が誕生するか楽しみにしている松本先生だが、今後の課題は山積みという。

「まずはキャンパシティの問題。毎回これくらいの人数が集まるなら、専任の教員を置かなければならないし、商学部のコストで行う以上、商学部を希望する生徒のみに制限すべきだという声もあります。大学側の受け入れ体制も整えるべきだという意見と、大学の授業と検定は別という意見との対立もあります。四高校の行事日程も調整してもらわなくてはなりません。これらの問題をクリアしていないと、本当の意味で高大連携といえるようなプログラムにはならないと思います」

多くの人々の努力により、高大、そして受講生すべてが満足できるプログラムになる日も近いと期待されている。